

政治と宗教研究会より

宗教倫理と政治統合

アメリカ合衆国の場合

古矢 旬

一 はじめに——アメリカ合衆国における宗教

アメリカ合衆国における政治と宗教のかかわりについてお話しいたします。その場合、アメリカ人一般の日常生活にとって宗教がきわめて重要であることは、ほとんど自明なように思われます。最近の世論調査も、アメリカ社会と国民とが、現代の先進資本主義諸国のなかで例外的に「宗教的」であることを明らかにしています。たとえば、一九八〇年代の調査では、アメリカ人の十人中九人はなんらかの宗教への選好をもち、

八人は「宗教が自らの人生にとって大事な問題である」と答えています。さらに十人中四人は教会もしくはシナゴグへ毎週末定期的に行くことを習慣にしているといえます。それらの定期的な教会出席者の三分の一は、同性愛者はよきキリスト教徒もしくはユダヤ教徒にはなりえないと断じています。アメリカ人の「彼岸志向性」は、天使の存在を信じるに答えたティーン・エイジャーの率が七〇％近くに達するという数字にも示されています。これらの数字をみるならば、アメリカの家庭、学校、職場、街頭での社会生活において宗

教が強力な社会統制の原理、秩序原理として働いているであろうことはおよそ想像できます。

その点、政治生活もむろん例外ではありません。少し古いデータですが、一九八四年の選挙の際、五十一%のアメリカ人は「無神論者には投票しない」と言明しています。またカーターやレーガンなどが選挙運動中におこなったように、候補者の側でも、自身の敬虔さを強調するために、しばしば自らが「生まれ変わったキリスト教徒」であることを公言します。さらに宗教は、本来政教分離を旨とする公共的制度や政治的儀式にもいろいろなかたちをとって深くくい込んでいます。たとえば大統領就任式においても行われる、憲法第二条第一節第八項による新大統領の宣誓は、左手をバイブルにのせ、右手を挙げて神に誓うという形式に従うのが慣例です。合衆国紙幣、貨幣には、「我ら神に信頼す」というモットーが刻まれており、国の祝日のじつに多くが、宗教的由来に基づいております。こうしたいわば国民の共通了解としての「公共的宗教性」に着目して、一部の宗教学者、社会学者は「市民宗教

(civil religion)」（あるいは「世俗宗教」）の存在を指摘しています。

このように現代のアメリカの国民生活において宗教はきわめて重要な役割をはたしていますが、その場合ひとくちに宗教といっても、そこにはいくつか明白に分離できる次元が潜んでいることに注意しなければなりません。その一つは「個人倫理としての宗教」です。もう一つは教会や宗教団体によって代表される「組織的活動としての宗教」です。さらには、キリスト教あるいはユダヤ・キリスト教を主たる背景としてアメリカ史が展開されてきたことから、アメリカにはそれらの宗教がもたらしてきた社会的伝統や習俗が顕著に認められます。そこに「個人的」でも「組織的」でもない、いわば「社会習俗としての宗教」という次元もみとめられましょう。そうした習俗が社会一般に共通にみられ、それが世俗権力によって高度に制度化されるとき、「市民宗教」が姿を現わしてくるとも考えられます。

ところで、アメリカ人の宗教生活をこのように「個

人の内面」「信仰組織」「社会的習俗」「市民宗教」といったいくつかの層から構成されてきたとみるならば、一九五〇年代まではこれらの各層は共存し、たがいにある程度うまく連動してきたといってもよいでしょう。しかし、最近の二十から三十年間にそれまで比較的安定していたこれらの層のあいだに深刻な違和が生じてきたようにみえます。主流派のプロテスタント諸教派が衰退し、カルト的な新宗教が台頭してきたり、テレビを利用した大衆的な福音伝道が常態となり、ファンダメンタリズムがふたたび勢いを得ていることなどに、そうした宗教的な地殻変動の様相がうかがえます。

こうした宗教世界の変容が、アメリカの場合どのようなして起こってきたのか、その行き着く先はいったいどのような社会なのだろうか、以下の報告ではこれらの問題に仮説的に答えることを目的としています。そこで最初にアメリカの宗教の起源にまで遡って、その特色の由来を問うことから始めたいと思います。アメリカ宗教の特質といった場合、まず先住民の宗教がむろん問題になりましょう。とくに一九六〇年代以

降、先住民、アメリカ・インディアン精神世界の見直しということが行なわれていますし、キリスト教と先住民の関係も新しい歴史学の対象になってきています。しかし先住民の宗教をかりに今除くとすれば、アメリカの宗教はやはりキリスト教、なかでもプロテスタントイズムとして始まっていて、そこに四つほど特徴がみとめられます。この四つの特徴はすべて歴史的に形成されてきたものであり、しかも四つがたがいに連関しています。

第一の特色は、アメリカのプロテスタントイズムは教派間の相互容認を前提とするという意味で自由教会制を基本としてきたことです。つまりアメリカの教会は公定教会として始まっているのではないのです。そもそもキリスト教がないところにキリスト教徒が入りこんで作った教会であつたために、自由教会が原則になっています。植民の当初にはヨーロッパのような教区制度やパリッシュといった制度がありませんから、共同体のなかに生まれることがそのまま共同体の共通の宗教世界のなかに生まれることにはならないところ

に、アメリカの特色があります。その結果、アメリカ宗教の第二の特色として自発主義、ヴォランタリズムといわれる傾向が生じています。すなわち信仰を自分で選ぶという契機がアメリカの宗教にとって非常に大事になってきます。

さらに、自由教会制をとっていますからヨーロッパからいろいろな教派の人々が入りこんできて、そして共存していきます。移民によって多くの教派が渡来して共存を許される結果、さらにそれらの教派の間で教派を超えてキリスト教プロテスタント的な信仰復興運動が繰り返して起きます。こうしてヨーロッパでは考えられないほど多元的な教派からなる共通の宗教世界というものが生まれてくる。これが第三の特色です。これを別の見方をするならば、アメリカ宗教の第四の特色として、一定空間のなかに多数の教派が共存するという意味で、デノミネーションナリズムという言葉であらわされる現象を指摘できます。国家にあるいは公権力に支えられた宗教はしばしば異端を生み出すけれども、その政治権力をおしての宗教的迫害がヨーロッパ

ロッパの場合には非常に普遍的な現象としてみられます。これに対して、アメリカでは、世俗権力と結びついた正統的信仰と異端とが、同一の空間内でのぎをけずるという事態は生じにくかったといえます。多元的に教派が分立して共存し、どんな小さな教派までが存在を認められていくという質を、アメリカの宗教界は本来的にもっているわけです。

そこで、当然のことながら、アメリカがキリスト教国家であるというときには、この教派的な多様性が一体どういうふうに統一されてきたのかという問題が生じてきます。これは斎藤真先生が昔から指摘されている自由と統合の矛盾というアメリカ政治社会に特有の問題が、宗教の問題についても現われてくるということです。

さてそこで上のようなアメリカ宗教のいくつかの特質を、あえて大きくまとめてしまうと、それは結局多元性とヴォランタリズムに集約できるだろうと私は思います。

二 アメリカ宗教の多元性

多元性とヴォランタリズムというのは相携えて発展してきた現象ですけれども、その起源をもう少し詳しく考えてみたいと思います。

アメリカ宗教の多元性は、ヨーロッパのようにカトリック世界が分裂するなから生じてきた多元性とはずいぶん質が違います。一つにはルイス・ハーツ以来のテーゼですけれども、アメリカにはヨーロッパ社会の断片が渡来してくる。アメリカにはヨーロッパ丸ごとがきたわけではなく、その断片がくる。そのようにやってきた断片を社会階層の面からみれば、封建制とかアンシャン・レジームの主要な要素である貴族や僧侶階級とかあるいは逆に貧農というような旧ヨーロッパ特有の社会層ではなく、より中間的な市民層が多くを占めていました。したがって、非常に平等で平準化され同質化された人間集団がヨーロッパからの移民の主要部分を占めていました。基本的には社会階層で見れば、自由な小農からなる移民たちがアメリカに移民

してきて、アメリカを作ってきたわけです。ただし社会階層の面では非常に平準的で同質的であっても、宗教的にはそうならない。初期の移民のもっとも主要な動機として宗教的な自由の達成という目的があるのですけれども、ヨーロッパ諸国において非主流的信仰を抱く多くの人々が機会を求めてアメリカに渡来してきました。

こうしてやってきた宗教・教派がアメリカになるとどういうことになったかという点、これがちよつと皮肉なことですけれども、教派間の住み分けをするわけです。住み分けが可能になった一つの大きな理由は、当然アメリカでは空間が非常に大きかったということにあります。十三植民地だけでイギリスの三から四倍、フランスの一・六倍の大きさがあったのです。つまり非常に過疎的な広大な土地に、非常に多様な宗教がやってきた。そのことはむしろ、特定宗教が特定の土地に盤踞して自らの宗教によってある程度の広さの土地を支配することが逆に可能になるわけです。そうすると、本来自由教会制が始まったはずなのに個別の小さ

な土地をみてみると、かえって公定教会制的な制度と
いうのがとられている。アメリカ全体でみると自由教
会制といえても、ミクロにながめると小さな規模の公
定教会制がモザイク状に併立していることになります。

その公定教会制の内側をみると、自由を求めてきた
はずの人々が、自分の住むところでは他の人の宗教的
自由を抑圧するという逆説が生まれてくるということ
になります。いくつかの例外を除いて、各植民地はだ
いたい公定宗教をもっていました。少なくともアメリ
カ史の初期においては自由教会制というアメリカの宗
教界についてその後一般化した通念とはかなり違っ
ていたということです。例えばマサチューセッツにおい
ては、コングリゲーションイズムがほぼ公定教会とし
ては、一時期神権政治に近い状態を呈していました。
つまり、そこでは宗教契約と政治契約が一致してい
たということです。

このようにアメリカには同じ信仰に基づく者の排他
的な宗教共同体が小規模にできあがるケースもままあ
ったわけです。このことはアメリカに宗教的な自由と

機会を求めてやってきた人たちにとって危険なこと
もありました。すなわち、自分たちの信仰を自由に発
揮することができるといことは、同時にその信仰に
基づき安定した制度を作りやすいということを意味し
ます。しかしこの信仰の制度化は、逆に個人の信仰心
の弛みを誘う結果ともなったのです。当初はプロテ
スタンティズム的な個人の回心に基づく共同体といっ
たような非常に宗教性の高い制度であったはずの教会が、
しだいに何世代も経るうちに公定教会制になって、個
人のレベルでは非常に信仰心が弛んでくるというこ
とが起こります。とりわけピューリタンにそれが起こ
ったわけです。

いづれどこにおいても宗教的な自発性、任意性と制
度宗教（あるいはもっとそれが進んだ場合には公定宗教制、
あるいは国教会制となるわけですが）との間には矛盾
が存在しています。アメリカのプロテスタントの場合、
本来が自発主義をたてまえてきているだけに、その矛
盾が非常に先鋭に現われることになります。アメリカ
の各植民地では、大体十八世紀のはじめぐらいまでに

制度宗教が固定化して、マンネリ化した結果、ピュ
リタニズムをはじめとして新たな信仰復興をめざす動
き、有名な大覚醒の動きがでています。

制度のなかで腐敗した人間が、もう一度自分のイニ
シアティブによって信仰を回復していくという非常に
激しい運動が、一七三〇年代のアメリカ植民地で起
るわけです。このいわゆる大覚醒が、移民についてア
メリカの宗教を個人主義化した第二番目の要因だった
と考えて良いと思います。ピューリタンの植民地が公
定教会制をとったことから、やがてその教会が外在的
制度と化し、信仰が形式化していく。かつてビルグリ
ム・ファザーズがオランダに行つて、オランダは豊
かである、豊かでありすぎる結果子どもたちが真面目
に信仰しない、それでついにアメリカに渡来するとい
ういきさつがありました。十八世紀初頭の植民地社
会も非常に急速に社会発展、経済発展を遂げていたと
いわれております。社会経済的な機会が拡大し、同時
に人口が増加する発展的な社会ではつねにそうすけ
れども、前の世代の次の世代に対する権威あるいは統

制力というものが衰えてくる。たとえば結婚なども個
人間の愛の結果としての結婚というような、より自発
性を重んじる風習が、この時期の植民地に現われるよ
うになります。こうした社会情勢のなかで、それまで
プロテスタントによって重視されてきた信仰における
個人の回心という契機は軽視されるようになってくる。
これを改めることが、大覚醒運動の一大目標となつて
きます。

アメリカのキリスト教の一つの大きな特性であるエ
ヴァンジェリカルイズム、福音主義とは何かという点に
ついて、最近ある学者がその特色を四つにまとめてい
ます。一つは回心です。つまり、生活というのは変え
なければならぬ、人生というのはより良い方向に変
えなければならぬという非常に強い意志をもって、
自分の生活を自分の意志で変えていくということです。
次にそれから福音を自分の外側の行為に表す、アクシ
ョンによって福音を表現していくという義務が二つめ。
三つめが聖書主義で、何よりも聖書を重視する、聖書
にしたがって生きる。四つめが宗教的な意味が私など

にはちよつとわかりにくいのですが、クルーシセントリズム（十字架主義）、つまりキリストの犠牲を強調するという、この四つの要素がアメリカのエヴァンジェリカリズムの欠くべからざる必要十分条件だというわけです。

信仰の衰退期にはこの四つを強調することによって信仰復興運動が起こるといわれます。大覚醒の場合、とりわけジョン・ササン・エドワーズとジョージ・ホイットフィールドという二人がこのような信仰復興運動の指導者になります。この二人はいろいろな意味で対照的です。エドワーズはプリンストン大学（当時はニュージャーシー大学ですが）の総長にまでなつて亡くなる人ですが、そういう意味でインテリで知的な指導者です。それに対してイギリスからやってきたホイットフィールドは、非常に熱烈な信仰復興運動を展開し、西部の奥地にまで出かけていつて人々に原始的な信仰様式の復興を訴えるといった活動を行ないます。この巡回して福音を説くという形式が、その後アメリカの宗教の一つのパターンを作っていきます。

共和主義的な政治運動とは常に軌を一にしていって、大覚醒が信仰の腐敗を攻撃する一方で、リパブリカニズムは反共和主義的なテイラーを攻撃した。この二つが相まったことによつて、はじめてアメリカの政治革命と精神的なヨーロッパからの自立というのがありえたのだと説明する歴史家もいます。

結局のところ、信仰復興運動というのは個人の宗教的な主権あるいは個人の良心こそが、そのみが、宗教において何が善であるかを決定するという信念を柱としており、その信念がデモクラシーの精神的な背景を形成するということになります。宗教的主体性はやがて政治的な主権に変換されていつて、植民地社会がある意味で制度化しヨーロッパ化しつつあるときには、アメリカが自らの「アメリカ性」を確認する運動を触発していきます。

福音の伝導を促したもう一つの要因として十九世紀の西部があります。これは自然に対する文明の浸透過程として考えることができるのですけれども、文明がある意味で自然のなかに定着していくと、社会関係は

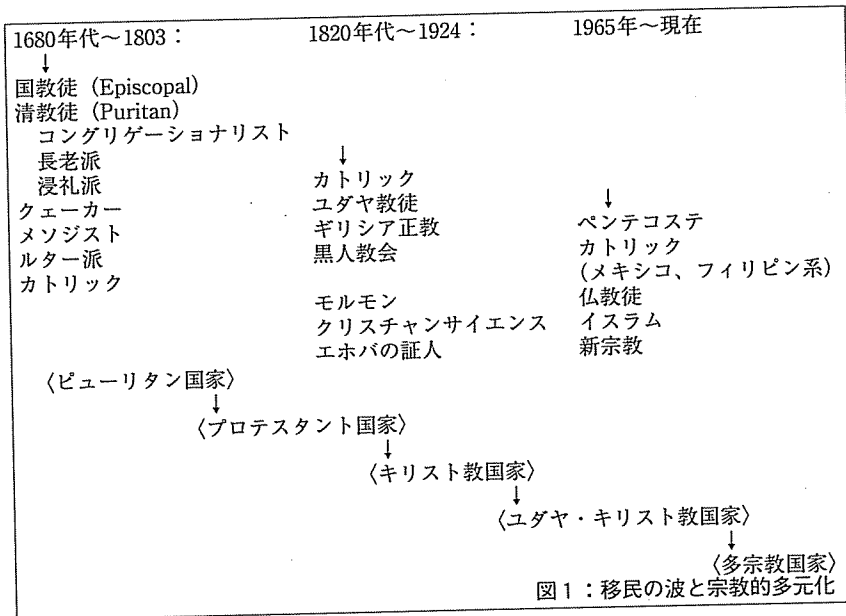
これとおそらく同じことが十九世紀の西部においても行なわれたのだらうと思います。西部の農民すなわち当時ニューライト（新しい光）といわれた宗教的一派と十九世紀の保守的な宗教的エスタブリッシュメントとの間には対立がありました。これは政治史の場合ですと、しばしば西部の農民対銀行というような対立で描かれるのですけれども、その背後にアメリカの精神的な世界の主導権をめぐる争いが西部と東部の間であつたと考えても良いかと思っています。

この大覚醒から第二の大覚醒といわれる十九世紀前半の信仰復興運動にかけて、人々は社会組織ではなくて内面の光だとか神の声に直接依拠して自分の人生の行動を決めていくという傾向がアメリカの宗教のなかに強くなってくる。これは現在もおそらく新宗教まで続いている伝統的なアメリカの宗教観だといつて良いと思います。政治的にみると、大覚醒は政府に対する批判の権利をも正当化したというふうにいわれております。ですから、ヨーロッパ的な旧制度や社会組織の硬化、伝統化に対する批判という点で、大覚醒運動と

安定化する反面、制度化してヨーロッパ的な旧文明的、旧世界的な腐敗現象というのを起こしてくる。アメリカはそのたびにさらに奥の西部に出かけていつて、その文明を更新するというをやつてきたように思われます。その過程でアメリカ独自の宗教風土が作られてきたと考えて良いと思います。

この福音伝導というモチーフは、いうまでもなく大覚醒に始まり、十九世紀のキャンプ集会や戸別訪問の流行をひき起こし、さらには二十世紀になればラジオやテレビによる宗教活動にまで及んできていると思います。福音伝導は、自発性や任意性に基づく信者の獲得競争という意味合いをもっています。

つまり教区のなかに安住して聖職者が信者を獲得できるというシステムではありませんから、また自由教会制でもありましたから、教派間の非常に厳しい競争があります。信者を獲得するということにミッションというニュアンスが付け加わつて、ミッション間の競争がアメリカのキリスト教の生命を保たせていったとも考えられます。



アメリカ宗教の多元化はその後進んでいきますが、それを促した要因の一つに移民があります。移民集団がそれぞれに教派をもつてくることで多元化が進んでいくわけです。多元化するということはそのままアメリカのなかに含み込まれる教派の数が増えていくことになりますから、そうして内包されていた人々、宗教集団の存在を認めるためにアメリカ国家の自己イメージというのがだんだん変わってくるわけです。ピューリタン国家からプロテスタント国家、キリスト教国家、ユダヤ教国家それから多宗教国家というふうに変わっていく、その過程が移民の波とほぼ連動してアメリカの場合起こってきます。アメリカ社会は、ある意味で最初の段階からすでに多元的です。これは斎藤先生がそもそもプリマス植民地が多元的であったということをおっしゃっています。それ以外にも一六五〇年の段階ですでに、公定宗教制をとっているかなりの地

三 都市型社会における 宗教的多元性と政治統合

さて、公定宗教と自発主義の間の緊張といったような議論だけではなく、アメリカのプロテスタントの多元的世界の特色としても一つ指摘しておかなければなりません。つまり寛容の原則、そしてそこから発展してきた政教分離の原則です。これらの原則は自由教会の原理からくるもうひとつの特色です。ただし、寛容といい、政教分離といい、一朝一夕に確立した原則ではありません。たとえば一六三九年のコネティカット基本法をみてみましょう。その第四条に「……総督は、承認された会衆教団 (congregation) の何れかの所属員でなければなりません。……」とあります。これは明らかに政治的な権利としての総督という支配的地位が特定の宗教に基づいて規定されているのですから、その意味では神権政治的な文章といえます。しかし同時に、同じ四条では執政官の、また七条では議会の議員の資格を単に自由公民 (フリーマン) としていることをみるならば、このコネティカット基本法には、政治と宗教の分離の萌芽をみることができます。その意味でこの法は公定教会制と政教分離制の中間にあるといえ

ます。そして後者の面を發展させていくと、有名なジェファソンのヴァージニア信教自由法になりますし、さらにはアメリカ合衆国の修正第一条の政教分離原則というところにいきつくわけです。これら一連の法は、広くロジャー・ウィリアムスなどの論議も含めて、事実として日々多元化しつつあるアメリカの宗教世界の多元性、多元化の趨勢を追認し正当化する側面をもっていたと思います。

ただしこの自由化の流れは、もう一方で公定制の継続と併存していたということは注意しておかなければいけません。たとえばニューハンプシャーでは一八一七年までコングリゲーションナリズムが公定宗教でし、コネティカットでは一八一八年、マサチューセッツでは一八三三年までコングリゲーションナリズムが公定宗教の地位を保っていました。ですから、アメリカは政教分離だという場合、すべてつねに政教分離が原則で宗教世界が展開されてきたわけではないということは注意しておかなければいけないと思います。

区内でもいくつかの教派間共存の例があります。たとえばバプテストがマサチューセッツで教会を開いたりしていますから、もう一六五〇年の段階で宗教的な多元性の萌芽ははつきりわかると思います。

さらに百年たつて一七五〇年になると、アメリカの各地で多教派がたがいに入り混じり共存するという傾向が決定的になります。これはヨーロッパの宗教界からみると考えられないような事態です。そのうえにさらに移民がやってくるわけですから、移民によって新しい宗教的な要素が付け加わって、アメリカの宗教界が複雑化し多元化していくのですけれども、その場合の多元化は単に宗教の教派が増えたというにとどまりません。たとえばカトリックは図1の示す三つの移民の波のいずれにも含まれていますけれども、その際教義宗教としてのカトリシズムとは別にエスニック・レリジヨンの分断線も移民とともに入ってくることに注意しておかなければいけないと思います。たとえばニューヨーク市のカトリックをみればわかるのですが、アイリッシュとイタリアンとはリチュアルからして違う。

ヤ教徒はどちらかというとロシア、ポーランド、東欧系のユダヤ教が多く、それ以前のユダヤ教徒がイギリス系、イギリス諸島からやってきた人々が多いことと対蹠的です。このように多かれ少なかれ各教派のなかに先着の移民がもってきた宗教生活と後発の移民がもってきたそれとが重なって現われている。それがまたアメリカの宗教界を複雑に多元化・細分化しているといえます。宗教的なモザイクを平面図でみていくとわからない部分もあるということをご注意いただきたいと思っています。

こういうふうに移住集団が増えると同時に、都市型社会が現われてきます。そのときに都市的な大衆伝道が起こってきます。これもまたある種の信仰復興運動だと考えても良いのですけれども、都市型の社会のなかで起こるさまざまな社会問題に対してキリスト教の諸派が応えようとするところから生じてくる運動です。工業化・都市化とともに、たとえばプロテスタントの諸派が社会問題に目覚めて、YMCAを作ったり日曜学校を開いたりというようなことが十九世紀の末から

同じ聖母祭をやってもまったく違った祭をします。それはアイランドとかイタリアのもっと土俗的な宗教の影響もあるのかも知れませんが、カトリックだから同じ教会に属しているふうにはなかなかいきません。したがって同じカトリックでありながら、やはり同じ教派の中で多元化が進むのです。これは移民とか多様な民族人種が作り上げている世界なのです。

それは現在も多元化が進行中の世界です。つまり今は西南部のほうのカトリックのほとんどはメキシコ系とかフィリピンからきた人々でして、それから東部のシカゴ、ニューヨークはカリブ海出身のヒスパニック系の移民が多く十九世紀以来のアイランド系やイタリア系に後から加わるかたちになっています。同じカトリックという教派の中に歴史的に積み上げられた地層が潜んでいるということです。それが必ずしも同じ地層を形成していない。横から見ると断層になっているということです。それはカトリックの場合に非常に顕著だろうと思います。それからユダヤ教も数は少ないのですけれども、十九世紀の末に入ってきたユダ

始まります。

ここでもう一つ付け加えておかなければいけないのは、十九世紀末のプロテスタント国家からユダヤ・キリスト教国家への展開のなかで、アメリカ型の新宗教がすでに現われてきている点です。何を新宗教とかというのは問題ですが、当時明らかにモルモンやクリスチャン・サイエンスやエホバの証人などは新宗教でした。モルモンなどは、アメリカという土地でしかも西部がなければ、その存在はおよそ考えられないのではないかと思えるぐらいアメリカ的な宗教です。こうした新宗教以上にユダヤ、カトリックがそれまでのプロテスタント国家を大きく変えた点が重要です。つまりカトリック系やユダヤ系の移民は、このころ都市内にゲットーを作って都市教会を作り、あるいは都市シナゴグを作ってプロテスタントの土着主義と対立していくという状況が、十九世紀からケネディの就任ぐらいまでの間ずっと続くのです。

このように多元化が進んでいくのと軌を一にして、フロンティアが失われていきます。その結果、新しく

やってきた教派が西部に行つて自らの宗教生活を展開するチャンスが失われていきますから、時が経つにつれて必然的にいろいろな教派が同一地域内に共存を迫られる、隣が非常に近くなつてくるという問題が起つてきます。その時異教派同士が共存をはかるために必要な一つの課題は、政教分離原則の再確認です。そこで非常に大きな問題になつたのが、教育です。つまり各教派が比較的離れて住み分けているときは、教育は主として特定教派が担つていたわけです。十九世紀になつて、公立学校ができ政教分離原則が確立しますが、基本的にはプロテスタントが公教育を担つていた時期が長く続きます。大学についてもハーヴァードはコングリゲーションだしプリンスストンはプレスビテリアンだしというふうに、大学の場合も教派色が強かつたのです。初等・中等教育の場合はある種の教区学校で展開されてきました。こういったそれまでの教育と教会の事実上の親縁関係を引き離す政教分離の過程を、アメリカの宗教世界は経てきたわけです。

にもかかわらず近年にいたつても、教育と教会の分

断線は非常にあいまいです。あいまいにならざるをえない状況があります。たとえば一九六五年の初等・中等教育法というジョンソン政権下の貧困対策の一環をみてみましょう。この法によつて初等・中等教育に連邦援助を与えるというときに、つまり教科書の無償配布や図書館の設立や教育センターの設置などを各学校を対象に実施していくときに、連邦政府は貧困家庭の子女の通学数を基準にして援助の規模を決めていきます。その場合に私立と公立両方に一律に適用するということをやります。そうすると、特定教派の教区学校や私立学校への援助は、果たして政教分離原則にてらして合憲なのかという問題が起ります。ひとつの判例では、連邦政府が住民の福祉に責任をもとうとするとしても宗教的な側面はついてまわらざるをえない。したがつて、連邦政府が教区学校を援助するということとは、特定の宗教を援助することが目的なのではなくて、貧困者を援助した結果なのだから合憲であるとしています。

こうした政府による教育補助以外にも、進化論教育

や学校礼拝の問題もあります。これらの問題は、つきつめていけば次の世代の市民を育てる際に、公権力は果たしてどこまで宗教教育に介入して良いのかという問題として起つてきているのです。同時に、大学教育などのレベルでも科学と宗教の問題、十九世紀のダーウィニズム以後の科学の問題を、いったいアメリカのプロテスタントイズムはどういうふうに消化してきたのか、いわゆる世俗化と近代主義に対するキリスト教からの抵抗を科学の側がどう受けとめるかという問題もあります。いつてみればそれらはアメリカにおける『神の国』問題ともいえます。

ファンダメンタリスムの問題についてももう少し付言しておきますと、アメリカ社会がファンダメンタリストばかりの時は、ファンダメンタリストはあまり目立たないわけです。十九世紀の前半の民衆的なバイブルリズムに現在のファンダメンタリズムの根っ子はあるのでしようけれども、ファンダメンタリズムが明確な社会的争点となるのは、やはり近代化、世俗化の進んだ都市型の社会にアメリカがなつてくる一九〇〇年代

最初の十年間ぐらいからです。実際にファンダメンタリストという言葉が使われるようになったのは一九〇〇年代の一時の時期であつたといわれています。この時期に聖書批判が強くなつてきた時代風潮に対抗して、保守的プロテスタントの一部が聖書擁護の論陣をはります。これがファンダメンタリストのそもそもの起源です。このファンダメンタリストは、聖書を擁護しキリスト教を擁護する熱意と強度において、普通のプロテスタントのエバンジェリカルリズム（例えばプレスビテリアン系にも福音主義的な人たちもいます）コングリゲーションにもいえます（けれども）とは比較になりません。ただ、たとえばペンテコスタリズムとかカルヴァン派・ルター派の告白主義とか、ある程度どの教派にも正統主義的な一派はいますし、それらの正統的あるいは保守的な教派も、多少とも現代のファンダメンタリズムの潮流に流れ込んできているといえます。とくに南部のバプティストなどにみられる近代主義に対する強い憎悪は、現代のファンダメンタリストまでつながっている傾向だろうと思います。

ファンダメンタリズムの時代は大体一九二五年で終わったというふうに思われていた時期があります。一九二五年のスコープス裁判でブライアンが負けたときに、ファンダメンタリズムはもうダーウィニズムに、科学主義あるいは近代主義に負けたという議論があったのです。しかし実際はファンダメンタリストは意外としぶとくて、日曜学校やバイブルスクールなどいろいろな方法で地道な教宣活動を三〇年代から五〇年代に続けていたのです。彼らにとつてのチャンスは一九六〇年代にやってきます。この時代、福祉国家と科学的計画と世俗的な近代主義によつて、貧困から差別までの社会問題の全部を解決できるとみた政治が絶頂期を迎えたのです。いつてみれば世俗主義的な傲慢が社会の主潮になったときに、その対抗原理としてのファンダメンタリズムもチャンスを迎えたのです。

ファンダメンタリストの主な主張、たとえば反アボーションや学校礼拝の推進は、たしかに近代の潮流とは逆行しているかにみえます。しかしだからといって、ファンダメンタリズムをいちがいに反動的主張として

片づけるべきか否かについては論争があります。人によつては（宗教史をやる人には自身宗教者が多いのですけれども）ファンダメンタリズムにも良い点はあるといいます。近代アメリカでは種々の科学的な技術革新を利用して民衆生活を豊かにし近代化をはかつていくことが、社会的な、圧倒的な趨勢になったのですけれども、アメリカのファンダメンタリズムも、この趨勢にある程度は便乗します。つまり新しい通信のテクニクなどを利用しないとファンダメンタリズムのコーズ自体が社会にうまく伝達されず、広がっていかないという問題があります。ファンダメンタリズムはそういう曖昧なものを近代に対してもつていながら、にもかかわらず近代批判の根本的立場は維持するのです。人によつてはそこにこそファンダメンタリズムの貢献があるというのです。それはどんな貢献かというと、近代を利用しながら近代を批判する彼らの態度のなかに、素朴ではあるけれど、また科学的にみて洗練されてはいないけれど、機械的な近代的自然観に対する警戒を、人々のところにいつも呼び起こすような自然観や人間

観が潜んでいるということです。ファンダメンタリストとは超自然主義的なものに対する開かれた態度や関心を自分の内面にいつもブルのようにならめている人々であつて、彼らがあるおかげでアメリカは赤裸々な物質主義に対する歯どめをもっているといえるのであつて、だから少数であればファンダメンタリストもいて良いというような議論をする人もいます。この見解が妥当であるか否かはここでは問いません。しかし、この見解は、近代化・世俗化の極のような現代アメリカ社会にあつてなお、ファンダメンタリズムが執拗に存在し続けている理由をある程度説明しているともいえます。

四 アメリカ宗教の現段階

現段階の問題を簡単にお話ししておきたいと思ひます。おそらくアメリカ宗教史のなかで、一九六五年は、アメリカの宗教界にとって非常に大きな転換点になったのではないかと思ひます。一つにはメインライン・プロテスタント、たとえばプレスビテリアン、メ

ソジスト、北部のバプテスト、エビスコバルなどを含めたメイン・ラインといわれるプロテスタントの教会員数が一九六五年に頂点に達します。それから後、それは衰退を始めるのです。これと逆に、南部のバプテストはこの頃から増え始めるという（これはファンダメンタリズムの問題とも関連してくるかもしれませんが）興味深い逆行現象がみられます。一九六五年は前にのべた個人的な倫理、組織宗教、社会的なモレス（習俗）、シヴィル・レリジョンからなるアメリカ宗教の地層の安定が崩れ始めた時でもあります。五〇年代まではいとおうの宗教的なコンセンサスがあつた。すなわち、一つには宗教は個人の属性であり内面問題である、政治問題ではないという大前提が社会的に受け入れられていました。二つめは、にもかかわらず、倫理・道徳に關してはすべての宗教教派がほぼ一致した意見をもつており、それが政治の世界の基本的な道義性が支えているという了解です。つまり政治と宗教は分離しているのだけれども、政治を宗教的な倫理と道義が支えているというもう一つの暗黙のコンセンサスによつて、

五〇年代までの宗教世界の安定、政治世界の安定があったということ。

ただし、この二重の政治—宗教的コンセンサスには、当然時代的限界がありました。すなわち一つにはユダヤ・キリスト教以外の宗教に対する言及がないこと。二つめにはコンセンサスの核になっているのはあくまでもプロテスタンティズムであって、したがってカトリックやユダヤ教は、常にリチュアルの面や価値意識の面でプロテスタンティズムに妥協しながら、自分たちの宗教をアメリカの状況に合わせながら、アメリカのなかで非主流的ではあるけれど安定的な地歩を築いてきている。要するに五〇年代までのコンセンサスはユダヤ・キリスト教と呼ばれるけれども、カトリック、ユダヤ教あるいはギリシャ正教まで含めてユダヤ・キリスト教的な伝統に含まれるすべての要素に対して平等ではなかったということ、これが二つめの問題です。三つめには、ファンダメンタリストは、スコープス裁判以降一九二五年以降五〇年代にいたるまでは逼塞しているのです。このことがアメリカの宗教界の内圧

を高める結果になっていた。南部のバプティストをはじめとするファンダメンタリスト的な観点をもつ人々が、五〇年代の社会的宗教的コンセンサスからは排除されていたということです。それから四つめは、一九九〇年代冷戦の終焉以降の宗教界の変容とかかわってくることですけれども、このコンセンサスには、外側から反共主義という政治的イデオロギーの枠がはめられていたということです。したがって、それは宗教外在的な、世俗的、政治的脅威を裏打ちにしたコンセンサスであって、必ずしも宗教内在的なコンセンサスではなかったといえます。五つめには、マルティカルチュラルな観点がこのコンセンサスからは欠けていた。それはとりわけ男性優位であるし、エスニック・レリジョンもほとんど無視され、軽視されていたという問題です。こういう五つの限界はそのまま、一九六〇年代以降ベトナム戦争と都市における黒人の反乱、若者の反乱によって明らかにされてくることになります。

そこでまず六〇年代以降の変化を、教派的な観点からみてみます。そこでもっともしばしば指摘される現

象が、メインライン・チャーチの衰退です。その指摘が事実なのか、もし事実だとすると現代の習慣的教会

出席者の比率は、実際の世論調査の数字よりは下がっていてもいいはずではないかという疑問もあります。しかし多くの教会関係者自身もそういつているのですからメインライン・チャーチは衰退しつつあると仮定すると、その衰退因は実は教派の観点からだけみていたのではわからないとマーティン・マーティーなどもいつています。むしろ宗教の世界がキリスト教諸教派あるいはユダヤ教まで含めて、ユダヤ・キリスト教のさまざまな教派間の拮抗対立や連合のダイナミズムによってアメリカの宗教界の全般的状況が説明される時代は、六〇年代ではほぼ終わったのではないかとみられます。だから、脱教派的な観点から今の宗教界をみると、実情はわからないというふうにマーティーなどもういのです。

そこで脱教派的な観点とはどういうものかという、たとえば、フェミニズムの観点にたつ人々は、これまでのキリスト教史あるいはアメリカの宗教史のなかで、

女性果たしてきた役割をもう一度きちんと再評価すべきだと主張しています。

もう一つ、ファンダメンタリズムとやらんでペンテコステ派が六〇年代以降隆盛をむかえていることも注目されます。今世紀初頭キャンザスやロサンゼルスで現われたペンテコステは、教義的には聖霊の個人的体験に重きを置く点に特色がありますが、それ自体特定教団を作っているわけでも、プロテスタント内の一派でもありません。その活動は古い教派の内部や近年ではカトリックの内部でも展開されています。反近代のかつ福音主義的性格をもつペンテコステ派は、南米、アフリカにも広がり、人によっては正教会、ローマ・カトリック、プロテスタントにつぐ第四のキリスト教と呼ぶべきであるというまでに力を得ています。

その他にもさまざまな新宗教が一九六〇年代以降ぞくぞくと現われてきます。これはアメリカ人の精神性のありかたが、六〇年代以前に比べるとはるかに多様化してきた事実を反映しているのだと思います。宗教の意味内容が少なくとも若い人の間で変ってきている、

教義宗教から離れ、スピリチュアルな自己存在に対する見直しが始まっているとみることができます。それはまた、教義宗教においても、信仰の原点へ戻ろうという正統派への復帰というような現象として現われてくるわけです。たとえばユダヤ教徒の移民三世、四世のなかに、正統的なユダヤ教に復帰する若者が増えていくということがいわれます。それを教派の復興というふうにいえるのかどうかは問題です。いろいろな宗教で正統宗教に戻ろうとする動きというのをいったいどういうふうに考えていくかということです。それは教派の復興というよりは、むしろ物質主義的な現代社会のなかで倫理性や精神性をもう一回見直したときに、自分のなかにもしかしたら伝わっているかもしれない祖先のスピリチュアリティに仮託してものを語るといふ、そういう宗教心の勃興と解すべきかもしれません。

アメリカン・アカデミーの雑誌の「アメリカの宗教」と題された一九九八年の特集号のなかで、おもしろい観点を出している人がいます。フアン・エドアルド・

カンポという人ですが、「American Pilgrimage Landscapes」という論文を書いています。カンポによれば、アメリカの宗教はこれまでプロテスタンティズムの影響下でリチュアル、外在的な儀式を極力おさえつけてきた。ところが六〇年代以降そういうリチュアルが復活してきている。そのなかで非常に目立つのが、巡礼的な活動であるということです。このpilgrimageは、もともとはむろんPilgrim Fathersの巡礼なのですが、今アメリカの若い人々のpilgrimageは個人的な精神の安寧を求めているいろいろなところへ出かけていくことを含んでいます。この現代的pilgrimageには三つの層があるとカンポはいつています。一つは当然のことながら組織宗教(Organizational Religion)のレベルで、つまり教会をもち公式の教義をもつそれぞれの教派のメンバーが、それぞれの教会本部に定期的に詣でるという意味でのpilgrimageです。Organizational Religionはそれぞれ聖地を自分たちの宗派のなかにもっている、そういうところにかけてることによって自分の精神性を確認するという行為が広まっているといっています。

二つめはシビル・レリジョンの聖地巡礼です。このへんから観光とあまり区別がつかなくなってくるのですけれども、ラシュマ・マウンテンの大統領の顔を拝みに行ったりと、ゲティスバーグの戦場に詣でるとか、そういうのは純粋な意味で宗教的な行為と果たしていいのかどうか、そうではなくあるいはアメリカ人はアメリカの国家のミッションをもう一回見直すためにでかけていくといえなくもないという問題があります。

三つめはさらに広げてカンポはカルチュラル・レリジョンといつていて、デイズニーランドやアメリカン・フットボールまで宗教性で考えてしまうのです。そこまで広げて宗教というかどうかは問題だと思うのですが、少なくともその三重のpilgrimageの現象のなかで重視されるべきは、そこにアメリカの資本主義の活動が深く結びついているということです。つまり世俗化して近代化して商業化していけば宗教がなくなるというふうにはならないで、世俗化した部分が宗教を売り物にしてツアーを組んでしまうのです。そういう

現象がアメリカの宗教界にできています。それが果たして宗教の終わりというようにいえるかどうかという問題です。今後大きな問題になってくるのではないかと思います。

いずれにしろ、今アメリカでは宗教の世界が教義宗教や教派宗教を超えて広がっているようです。また同時に宗教史家が、教義史や宗派史を超えて、学問的な関心を従来の宗教観を超えたところに広げていつているという傾向もあります。ですからクリスチャン・サイエンスに対してシリアスな本が書かれたり、デビッド・クロケットやエルビス・プレスリーをある種の「セイント」とみて、彼らの聖人化という問題を論じるむきもあります。また歌手のマドンナに表現されるカトリック性とか聖地デイズニーランドとかもそうです。そういう現象に加え宗教のニューエイジ、新時代ということが最近いわれるようになってきています。たとえばウィッチクラフト、占星術、精神療法とかホメオパシーというようになちよと怪しげな新宗教的なものができています。

こういうこと全ての背後に、一九六五年以来のアメリカの宗教界に起こった西洋文明を主流とする宗教観に対する幻滅（これはアメリカの場合はベトナム戦争の影響が大きいと思いますけれども）が潜んでることは多分間違いないだろうと思います。世俗化の問題を、したがって制度宗教やメインライン・チャーチが衰退したから世俗化が起こったというように簡単に考えることはできない。むしろ宗教性と世俗性というのは時代を超えてさまざまな関わり方があって、宗教者自身も研究者もこれからいっただうやってそれを追求していくのかという問題が残っているのだと思います。

最後に市民社会統合の行く末について付言しておきます。これだけ多元化し、重層化しながら、アメリカの宗教界は、全体として日本の場合と違ってみんな生き生きと活動しているのです。そうすると、いったいそういう多元的・遠心的傾向を含む宗教界がどうして一つの国民社会のなかに収まっていられるのかという問題が最後にあると思います。

そこで問題になるのは、一つには各アメリカ人個々

の内面において、宗教的アイデンティティと政治的（市民的）アイデンティティがどのようにに関連しているのかということですが、もう一つ、アイデンティティの問題とは別に、アメリカ社会全体をつらぬく組織原理の問題があるように思います。これはマックス・スタックハウスがいつていることですが、依然として個人主義と自発主義を原則としているアメリカの宗教が社会を分裂させている背景には、二つの統合的組織原理が働いているとされます。その一つはもともとカトリシズムからきている。スタックハウスはこれを階層的・補完的視座（hierarchical-subsidiarity view）と呼びます。つまりハイアラーキーを作っているけれども上と下が補いあって、つまり上の人は下のために働き下の人は上からくる指示にしたがうという社会観です。とくに敬虔なカトリックのなかにはそういう社会観があつて、たとえばアポーションなどの問題への対処をみても、激しい対立的言辞のうちにもある種の社会統合的な、契機をみとめることができるというわけです。

もう一つの組織原理はプロテスタント的であつて、

連邦的・契約的視座（federal-covenant view）であつて、これはいわば人間社会の構成を個人の横のつながり、蜘蛛の巣状に横に無限にインターネットのようにつながっている組織とみます。その連合体にはまったく明確なセンターはないのだけれども、個人主義でしかも多様な参加を促している、その参加した人々がお互いに横につながっていることで、インターネットの世界を共有しているような宗教感覚は、やはりアメリカにまだ根強いのではないのでしょうか。そしてそれがもう一つの統合原理として働いていると考えられます。この二つの統合原理によってアメリカの市民社会がばらばらに解体してしまうことを抑制しているのだという議論は、アメリカの多元性と統合を説明する仮説としてきわめて示唆的だと思います。

（ふるや じゅん／北海道大学教授）

（本稿は、二〇〇〇年十月十二日に行われた研究会での報告内容に、加筆いただいたものです。）